

Iambic Pentameter について

埋 橋 勇 三

次の詩は Thomas Gray の *Elegy Written in a Country Churchyard* の冒頭の 4 行です。この詩は Gray's Elegy として知られていますが、書かれたのは 1751 年です。この詩のリズムは Iambic Pentameter であり、いわゆる弱強 5 歩格の詩としても有名です。まったくこの詩を読んだことのない人でも韻律についてはどこかで学ぶ機会があって、Gray's Elegy が Iambic Pentameter であることを知っていたりします。これはちょっと不思議な現象ですが、Gray's Elegy が有名なのは詩の内容だけでなく、韻律でも有名なことを間接的にはありますが、証明しているように思います。

私自身も Gray's Elegy に親しむ機会があり、英語の詩のなかではもっとも長く、深くかわりあったものの一つです。最初から最後までよどみなく暗唱できる詩の一つです。何度も暗唱しながらこの詩のリズムについて考えることがありました。暗唱しながら、果たして自分の読み方のリズムはこれでよいのかという素朴な疑問を持ちました。ある語をどのくらいの強さで、どのくらい長く読めばよいのか。強さ、長さをどのように考えればよいのか。そして、弱強 5 歩格で有名なこの詩の『弱強 5 歩格』の本当の意味はどういうことなのか。5 歩格の 5 はフットの数なので問題ないとしても、『弱強』のリズムとはどのようなものなのか。このことがわかれば、弱弱強、強弱、強弱弱、強強などが持つリズムもわかってくるのではないかと考えました。

この小論で扱うのは Gray's Elegy の Stanza 1 の 4 行です。まず、それを下に示します。念のために私の訳語もつけておきます。

The curfew tolls the knell of parting day,
The lowing herd wind slowly o'er the lea,
The plowman homeward plods his weary way,
And leaves the world to darkness and to me.

入相の鐘が別れ行く日に弔いの時を告げ、
 牛の群れが声をあげながらゆっくりと草地を巡り越え行く。
 農夫は家路につき、疲れ果てて重い足取りでとぼとぼと、
 そして、そのあとに残るは闇と私のみ。

次に音の最小単位であるシラブルを示します。複数のシラブルからなる語のシラブルの境目に「・」を入れます。弱強はシラブルを単位とします。行末に各行のシラブルの数を示しました。見てわかる通り、すべて 10 音節になっています。弱強 5 歩格は弱強が 5 つあるということなので、全部で 10 音節になり、数字的に余剰がないことになります。音節数から見ると、適切な弱強 5 歩格が期待できます。

The cur・few tolls the knell of part・ing day, (10)
 The low・ing herd wind slow・ly o'er the lea, (10)
 The plow・man home・ward plods his wea・ry way, (10)
 And leaves the world to dark・ness and to me. (10)

次に強く読むシラブルをゴチック体にします。音節内の母音の上に強勢があります。二重母音の場合には最初の母音の上に強勢がきます。そして、フットを示す縦棒を入れます。

The **cur**・| few **tolls** | the **knell** | of **part**・| ing **day**, (10)
 The **low**・| ing **herd** | wind **slow**・| ly **o'er** | the **lea**, (10)
 The **plow**・| man **home**・| ward **plods** | his **wea**・| ry **way**, (10)
 And **leaves** | the **world** | to **dark**・| ness **and** | to **me**. (10)

次に脚韻を確認します。day—way, lea—me の母音が同じであり規則的です。この詩は iambic pentameter（弱強 5 歩格）で、脚韻は abab です。これで scansion は終わりです。これまでに行われてきた scansion はここが終点で、この先がもうありません。しかし、私にとって、ここが問題の終わりではありません。一行目には強勢のある部分が四つありますが、この四つの強勢は同じ強さなののでしょうか。それとも違うのでしょうか。強く読む部分は、当然、時間がかかることになります。そのために、弱強を短長と言うことがあります。強勢のある部分の長さは同じなののでしょうか。それとも違うのでしょうか。単純

に考えればすぐにわかることなのですが、もし、すべての強が同じ強さ、同じ長さであるとするなら、この詩はあまりにも単調で機械的なものになり、詩でありながら詩ではなくなると思います。同様に弱が一様に弱であるとするなら、完全に機械的な詩になり、もはや詩ではなくなります。このような状態になると、この詩が持っている響きや音色が出てきません。そのために、詩人が醸し出そうとする雰囲気、伝えようとする微妙な意味が伝わなくなります。少なくとも上の四行の詩を読む時には機械的に読んでいるのではなく、詩的な響きを感じ取りながら読んでいるはずです。

このように考えると、必然的な結果として弱強5歩格、abab がわかったからと言って、詩の本質的な理解にはつながらないということになります。もちろん、これだけのことがわかるだけでも助けになりますが、詩の本質であるリズムについて疑問が解けるわけではありません。このレベルを超えて、更にリズムの世界に深く入らないと詩の本質が見えてこないように思えます。本稿ではこの闇の世界に少しでも踏み込めればよいと考えています。確認のために繰り返しておきますが、弱強5歩格、abab は詩のリズムの入口であって、本当のリズムはその先にあり、これが詩の音色を奏でるのにきわめて重要な役割を果たしていると仮定できます。

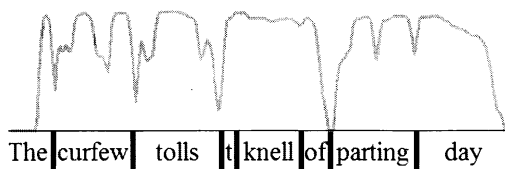
この目的を達成するためにどのようにしたらよいかを考えました。一つは上記の四行の朗読を手に入れることでした。私自身が耳で聞いて、意味を考えて、その上でたぶん、この朗読でよいであろうと思うものを搜しました。インターネット上には詩の朗読を聞くことができるサイトがたくさんありますが、そのなかで Clarica という女性の朗読を聞くことができました。このサイトの検索は "Clarica PoetryMoment" と入力することで行き着くことができます。問題となるのは Clarica の朗読がどれほどのものであるかをどのように判断するかということでした。Clarica 以外の朗読もあり、聞いてみたのですが、どうも Clarica のものが私にとってもっともよいものに思えました。人によってはほかの朗読の方がよいと感ずることもありえます。おそらく、詩の朗読の仕方は人それぞれで、聞く側もまたそれぞれだと思います。したがって、どの人の朗読がもっともよいかはわかりません。絶対的な評価はないと思います。「詩は好きなように読めばよい」ということを言う人もいますが、これは詩の朗読の多様性を認めた発言であると思います。仮に Clarica の朗読がそれほど価値がないとしても、このことは今、私が解き明かそうとしている問題に大きな影響を与えるものではありません。弱強5歩格、abab の詩形の奥にあるものを探ろうとしているのであり、朗読の良し悪しを判断することを目的としている

わけではありません。弱強 5 歩格、abab の奥にあると思われる、詩を詩たらしめている要素を考えようとしています。Clarica の朗読のなかにある要素はほかの人の朗読のなかにも含まれていると仮定しています。同じ要素が含まれているけれど、パターンが異なるだけであると私は考えています。したがって、Clarica の朗読を分析すれば、その手法はほかの朗読の分析にも使えるものと思っています。このような次第で、Clarica の朗読を分析対象としても、それが私の目的を達成するための障害になるとは考えていません。

朗読を分析する時には音声分析ソフトウェアを使います。人間の耳で聞いて、それを頭で分析することはきわめてむずかしいです。私が使ったのは Praat という音声分析ソフトです。Praat はオランダ語で「話」の意味だそうです。アムステルダム大学の Paul Boersma と David Weenink の両名を中心として開発されたものです。フリーソフトウェアで、しかも stand-alone です。使いやすいです。また、有り余る機能を備えています。今回使用したのは intensity を調べる機能です。そのほかの機能、たとえば pitch, pulse など使えますが、一度にいろいろな機能を混ぜ合わせることはせずに intensity だけに限り分析しました。

Clarica の音声と Praat 音声分析ソフトウェアを組み合わせて、Gray's Elegy の冒頭の四行を見てみようと思います。

まず、最初に一行目の分析結果を示します。



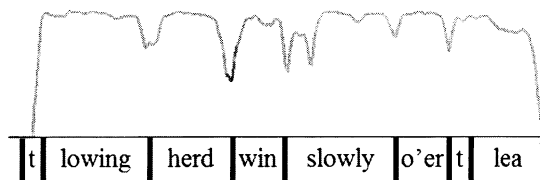
グラフの線は下に示してある語の強さを示します。高くなればなるほど強いということです。下の太い縦線は語の境目を示します。縦線を上の方に伸ばしていきますと、強さが弱いところ、つまりグラフで言えば谷になっているところにぶつかります。ここは語の境目を示します。the knell の the が t しか表示されていませんが、the を読む時間が短いために the と書くだけの十分なスペースが取れていません。そのために t のみの表示となっています。一行目の韻律分析はすでに示しましたので、それを参考にしてもらいたいのですが、cur と

few は強 | 弱 です。しかし、上の図では強さの度合いは cur と few はほぼ同じです。parting は韻律分析では強 | 弱ですが、これもほとんど強さの度合いが変わりません。-ing day は韻律分析では弱 | 強となるはずですが、やはり上の図では強さの度合いが変わりません。強さの度合いを見ると、韻律分析のゴチック体で示した部分が強で、ほかのところはすべて弱という考え方はあてはまりません。Knell の前の the と of を除けば、ほかの音節はほぼ同じ程度の強さになっています。行頭の the は強さだけを見れば、ほかの語の強さとほぼ同じ位置にあります。韻律分析で使う強は音声分析の強と必ずしも一致していないことがわかります。したがって、音声分析の強の基準が韻律分析の強の基準と異なることを示しています。グラフの谷になっているところは音節の境目を示しています。強さの度合いは絶対的な基準ではかるのではなく、谷の深さによって測るべきものと考えます。cur の直前の谷の方が few の直前の谷より深くなっています。強は弱と比較して相対的に定められると考えると、cur の方が few よりいくぶん強いことになります。Tolls の直前の谷は cur の直前の谷より深いので同じ強であっても、tolls の方が幾分、強く聞こえることになります。Knell の直前の谷はそれより深いので相対的に見ると knell の方が強くなります。Parting の前にある谷は一行目の中では最も深く、強さがゼロのところまで落ちています。したがって、parting の前には大きな切れ目 (pause のようなもの) があると考えられます。Part の部分が相対的に見ると最も強さの度合いが大きいことになります。Parting day の間にある谷はいずれもそれほど深くないので、切れ目が音節を示す程度のもので、意味的に parting day が一塊になっています。

強と弱の関係を上に述べましたが、韻律分析の強と弱が一致しないことがわかりました。そこで、音節の長さを比べてみます。The cur は韻律分析では弱強になります。上の図で the の時間幅と cur の時間幅をみると、明らかに cur の方が長いことがわかります。同様に few tolls を見ると、tolls の方が三倍ほど長くなっています。the knell では五、六倍、knell の方が長いです。of part では part の方が長いことは明らかです。ing と day は同じ一音節ですが、day の方ははるかに長くなっています。このように考えると、詩の韻律における弱や強を決定しているのは強さとか弱さというよりも、長さ、短さであると判断することができます。強弱のことを長短ということがあります。長短という言い方はあまり一般的でないかもしれませんが。しかし、長短の方がはるかに韻律を正確に表す表現であることがわかります。見逃せないことですが、the や of のような意味の軽い語は上の図では谷の位置に現れていて、これがその後に続く語、

強となる語の引き立て役になっていることがわかります。冠詞や前置詞のような語は詩においてはリズムを作り出すための影の主役として機能していると思われれます。行末に day がありますが、強い所からなだらかな線を描きながら下降しています。これは day でこの文が終わることを示しています。通常の文でもピリオドがあると下降調になりますが、それと同じことです。day のあとはコンマになっていますが、ここで一文が終わり、次に新たな文がくることを暗示しています。一行目の図に示された長さの山を見ると、curfew, tolls, knell, parting day の四つからなっていることがわかります。tolls を「トルズ」と読むと、図に示された長さは出てきませんので、「トウルズ」と読まなければなりません。knell も辞書に示された発音記号に従って、「ネル」と読むと、図に示された時間幅が維持できませんので、「ネール」のように母音を伸ばして読みます。このように読むことにより、入相の鐘のゆったりとした響きを出すことができます。

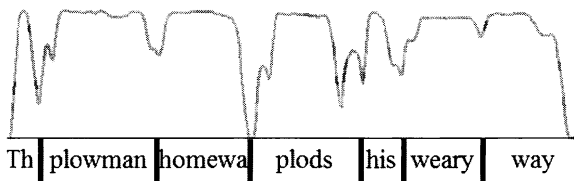
次に二行目を見てみます。



二カ所にある the と、wind [waɪnd] が途中で切れています。繰り返しになりますが、切れずに表記するほどの長さが無いことを示しています。二重母音を含む wind は the と違って十分に意味内容を持っている語ですが、長さが足りないということは、wind には強勢がないことを意味しています。最初の the は一番下から上に向かって急速に上がって low に続いています。The の発音が終わるまで強さが一番下にあるわけではなく、次の low にスムーズにつなげるために上昇気味に発音しています。Lowing の強さをみると、ほぼ一定です。この限りでは lowing 自体が一つの強をなすと考えますが、音節ごとに見ると、low の方が ing より倍の長さがあります。ing は強さが low と同じレベルにありますが、長さが半分で、しかも ing の末尾がかなり下降しています。ここでも強さは絶対的な基準とはなりえず、やはり長さが基本になっています。herd はそれなりの強さと長さがありますが、wind は高さがあっても長さが足りない

ので、短く、早めに読むことになります。slow はかなりの長さがあり、しかも low や herd のように水平の長さではなく、強さの上下が観察されます。この行の中ではもっとも複雑な箇所、単調ではありません。したがって、読み手の情感が微妙に反映していると考えられます。o'er は一定の強さで、slowly のところに見られるような小さな谷もなく、水平に進んでいます。o'er は over のことですが、over とすると二音節になりますので、小さな谷ができると思います。lea は一行目の day とほぼ同じような右下がりの下降線になって、行末にあることを暗示しています。この行にはほかの行に見られない大きな特徴があります。曲線に谷がありますが、深い谷ではなく、すべて浅い谷で一番下に達しているような谷は一つ也没有。herd の後の谷が一番深いですが、これは herd が主語であることを示していると思われます。それでもそれほど深い谷になっていません。その結果、この行を読む時には小さなパイブレーションを入れて、行全体を一息にポーズを入れずに読んでいくことになります。この表現が適切であるかどうかわかりませんが、大波ではなく小波のような印象を抱きます。四行のうちではもっともスピード感があり、ぎくしゃくすることなく流れています。牛が草原を越えて曲がりくねって進んでいる様子を表現するのにふさわしい曲線を描いているように思えます。

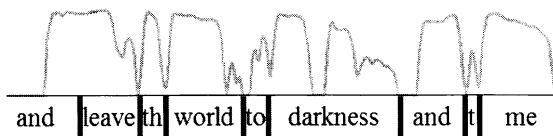
次に三行目に行きます。



The と homeward が切れています。The は一行目の the とほぼ同じ線を描いています。二行目の冒頭の the に比べて聞こえがよく長さが幾分あります。ということは、この the には音的に言ってより指示性が強く含まれていると考えることができます。plowman は同じ強さで平らに進んでいます。音節の切れ目を示す谷がほとんどありません。man の上の部分が plow に比べて少しだけへこんでいます。韻律分析で man が弱とされるのは強の前に見られる比較的深い谷がなく、長さが plow に比べて短いことが理由のように思えます。homeward の後にこの行でもっとも深い谷があり、下まで落ちています。もし、この行の

中で一ヶ所息継ぎををするとしたなら、ここしかありません。また、ここまでが主語であることを示しています。この行は The plowman plods his weary way homeward. とも散文的には書くことができますが、The plowman homeward とは意味が異なります。その理由は詩の方では homeward の後に大きな谷があり、この homeward を way の後に結び付けることができないからです。plods の前後に谷があり、ある程度の長さがありますので、韻律分析の通り強になります。前後の比較的深い谷により切り離されている感じがあるので、強く、あるいは長く、あるいはゆっくりと読む必要があります。そうすることにより、農夫の疲れたゆったりとした歩みが伝わってきます。His は人称代名詞ですから強く読みません。韻律分析でも弱に分類されます。弱に分類されるから強さがないかと言えば、そうではありません。曲線が示すように強さはあります。強さを持たない語は聞こえないことを意味します。これを一般化すると、すべての語は強さを持つということになります。違うのは長さです。his は長さがありませんので、弱に分類されます。weary way は途中で小さな谷がありますが、全体としてある程度の強さを持っています。形容詞と名詞の関係は密接なので、谷は浅くなります。形容詞と名詞の関係だけでなく、修飾関係が密接であるときには谷は浅くなります。この行の小さな谷を無視して、長さだけを考えると、plowman homeward, plods, weary way の三つのブロックに分かれます。一行目ですと、curfew, tolls, knell, parting day です。二行目ですと、lowing herd, wind, slowly o'er the lea のブロックに分かれます。このように考えると、詩にはブロックがあり、ブロック内に適度の谷を入れて、詩の音色をつくっているとも言えます。このブロックを取り違えると、恐らく、詩となりえないでしょう。それどころか言葉としても成立しないこともあると思います。最後の way はやはりなだらかな右下がりになっています。day と way、lea と me は脚韻を踏んでいて、abab のパターンになっています。[ei], [i:] のように母音の一致が決め手になりますが、右下がりのなだらかな曲線が母音のレベルを越えた脚韻の基調をなしていると考えられます。

次に四行目に移ります。



leaves, the, to が一部切れています。この行は上の三行と比べると著しい特徴があります。上の三行のなかでも、特に二行目と比べるとその特徴が一層明らかになります。二行目には下降上昇している部分、つまり谷が、大小合わせると、はっきりしているものだけでも7ヶ所くらいありますが、谷は下まで落ちていません。中ほどで止まっています。これに対して四行目には谷が十数ヶ所あり、しかも深い谷が多くあります。落ち込んでいる谷が途中で止まるのが少なく、ほとんどが一番下まで、あるいはその近くまで落ち込んでいます。四つの行を漠然と見ただけで、四行目の曲線が複雑であることは誰の目にも明らかです。強さのレベルの高いところが大小合わせて数ヶ所ありますが、その強さが続く時間、つまり長さが目立つ箇所が少ないです。強いて言えば leaves, world, me ですが、これまで検討してきた行に見られたような大きなブロックは見当たりません。このように小刻みに谷が何度も出て来ると、二行目のように流れるように読むことがむずかしくなります。各音節の意味を確認するように読んで行くことになります。darkness は dark の方が強いのですが、dark の後、下まで谷が落ちて、それから ness が続きます。二つ目の and は韻律分析では強になっています。これはその通りであって、通常はそれほど長さを持たない and がしっかりとした長さを持っていますので、暗がり (darkness) だけではないのですよ、私 (me) もですよと述べていることがよく伝わってきます。三行目から四行目は way and leaves と続きますが、グラフには出ていませんが、実際には way のあとに、小さな呼気の山があり、and を予測させます。その結果、and leaves のブロックが way の後にスムーズにつながります。四行目の最初の and は二つ目の and ほど強くはありませんが、the などと比べるとはるかに強いです。

ここまでが各行の検証になります。つぎに行と行を比べてみます。まず、気づくことは四つの行が描く山と谷の曲線に同じものがないということです。同じでなくとも、ほぼ同じと思えるものはありません。そんな中でどの行にも共通している部分があります。それは脚韻の部分で、day, lea, way, me はほぼ同じ下降曲線を描いています。それぞれの行がかなり異なる曲線を描いていて、言葉は適当でないかもしれませんが、ばらばらになっています。これを多様性と呼んでもよいでしょう。このような特徴を持つ四行を一つに束ねているもの、統一性を持たせているものが脚韻の部分の曲線です。途中がどんなリズムであろうと、最後の部分だけは同じリズムになっています。しかも下降曲線が同じだけでなく、[ei], [i:] という母音も同じです。詩のもっとも大きな特

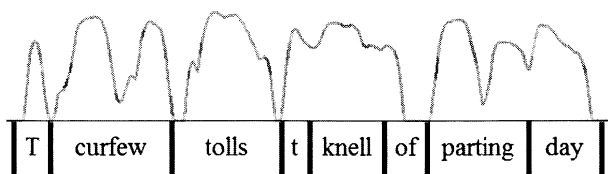
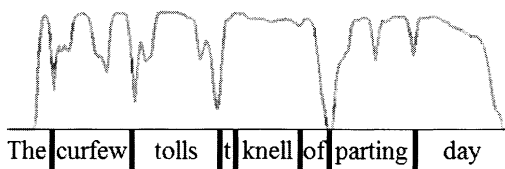
徴の一つが脚韻にあることは間違えのないところです。

次に谷の位置について見てみます。深い谷、下まで落ちている谷は一行目と三行目にあります。一行目ではこの谷が後ろよりにあり、三行目では中ほどにあります。一行目では深い谷より左側にいくつも鋭い谷が連なるのに対して、三行目では右方向にあります。四行目は全体に底まで落ちる谷がいくつも散りばめられています。しかし、ここまで谷がいくつもあると、強さのレベルが高いと時間的に下まで落ち切ることができません。四行目の大きな特徴は強いレベルと底の部分の幅がほかの三行に比べて狭いことです。三行目まではある程度、強さの幅を保っていますが、四行目は幾分、狭くなっています。締めくくりの四行目はやや全体的に強さのレベルを落としています。すでに触れるところがありましたが、二行目は違った意味で実に特徴的です。谷が浅く、下まで落ち切ることが最後まで続きます。非常に滑らかに流れています。

次に一行全体の長さを比較してみます。音節数は各行とも 10 音節あります。一行を読むために使う時間はほぼ同じです。音節の数が同じなのに読むために使う時間がそれぞれ異なるとすると、別の言い方をすれば、時間がばらばらだと、統一性に欠けてしまいます。詩の大きな特徴は一行を読むのにかける時間に制約があるということです。この時間を調整するために音節数が設定されていると考えることもできます。自由詩というのもありますが、詩の特徴は様々な制限のなかで無限に広がる創造性ではないかと思います。制限がないものは形を持ちません。

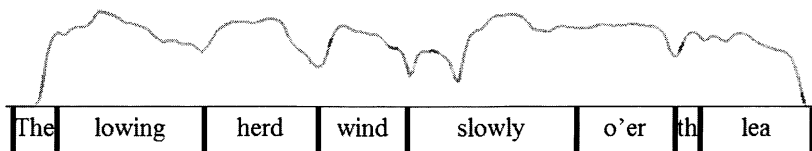
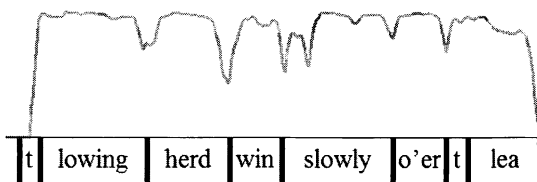
これまで Clarica の朗読の分析を行ってきましたが、比較するために Jason Mills の朗読を音声分析したものを示します。Jason Mills のもののみを示せばすむことですが、それだけですと視覚的に比較するためには、その都度、Clarica の音声分析の場所に戻らなければなりません。すると、実質的に比較がむずかしくなります。そのために Clarica と Jason Mills を並べて表示します。その方がずっとわかりやすくなると思います。最初に Clarica を再度示して、その後に Jason Mills を示します。

一行目



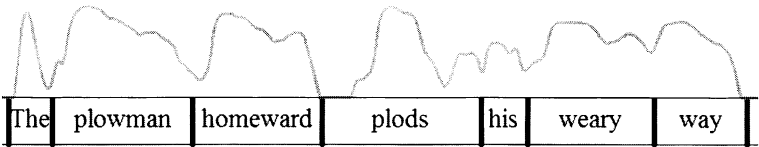
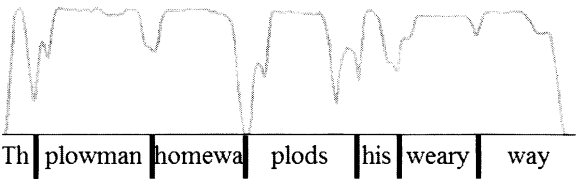
谷の位置は同じですが、下まで落ちている谷が Clarica では 1 つですが、Mills では 4 つになっています。山の形が平らであったり、でこぼこしたりしていますが、概ね両者は同じようになっていると考えてよいと思います。脚韻の部分の下降曲線も同じですが、Claricaの方が韻を充分響かせるために長めに読んでいます。Millsの方が山と谷の差が大きく頻度も多いので、ややスムーズさに欠けています。Millsの山の形も Claricaより複雑です。全体として見ると、Claricaの読みの方がスマートですし、素直な感じがします。

二行目



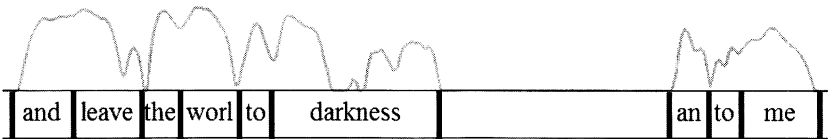
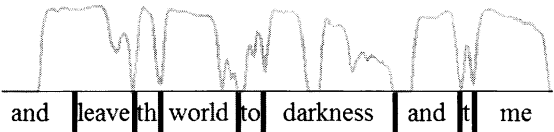
この行はどちらも谷が下まで落ちているところがありません。山の形、長さが異なりますが、ほぼ同じような読みをしていることがわかります。

三行目



同じ場所に谷がありますが、Mills の方の谷には長さがあります。ここで軽く一息入れているような感じで読んでいることがわかります。この行に限らず Mills の読みは山の部分に長さがありますので、「強」であることがわかります。しかし、水平に山の頂が進むことがなく、常に変化している「強」であるという特徴があります。

四行目



この行は谷がたくさんあり、両者の読みとも複雑になっています。二行目と反対の意味で、この行は四行の中ではもっとも特徴的です。Mills の読みでは darkness と and の間に異常に長い谷が続いています。ここまで長くなるのは異常な気がします。

ここまで Clarica の読みと Mills の読みをざっと比べてみたのですが、Mills の方が谷が下まで落ちている部分が多く、山は水平に移動することがなく常に変化しています。Clarica は女性で、Mills が男性であるということがこのような違いを引き起こしているということも考えられます。この比較からわかることは、両者は山の位置そのものはほぼ同じであり、その意味では同じ読みとなっています。ことに脚韻の部分の読みは類似しています。それにも拘わらず、山と谷の形状が異なるのはなぜでしょうか。これには様々なことが考えられると思いますが、私が重要だと考えているのは一行を読むのにかかる時間です。Mills の読みを見ると、一行読むのにかかる時間がまちまちです。同じ長さで読んでいる行が一つありません。一方、Clarica を見ると、ほぼすべての行が同じ長さになっています。音節で言いますと、一音節分の違いありません。Mills では最大で三音節分の違いがあります。もし、Mills が各行を読む時間を同じにするならば、不安定な山の形や谷の数が Clarica のものに近づくように思えます。一行を読むのにかける時間の問題が詩の朗読ではもっとも重要な要素になると思います。私は一行にかかる時間は同じでなければならないと考えています。音節数が同じであるなら、同じ時間にしなければならないと考えています。読み始めてから読み終わるまでの時間を決めておかなければ、無秩序な読み、好き勝手の読みになり、詩が持っている最大の特徴である形式、すなわち制限がもたらす詩の最大の魅力が引き出されないことになります。Clarica と Mills の音声分析が教えてくれることはこのことであると思います。

以上、Thomas Gray の弱強 5 歩格の詩、Elegy Written in a Country Churchyard の音声分析を行いました。その結果を次に列挙して、「まとめ」とします。これまでの弱強 5 歩格の詩の分析では触れられていなかったことが多く含まれていると思います。さらに詩形の問題を深く考えるために下記の要約が多少なりとも役立つのであれば、本稿の目的はある程度、達せられたものと考えています。

「まとめ」

- ・ 韻律分析における「弱強5歩格」における弱、強の概念は曖昧である。
- ・ 韻律分析と音声分析では弱強にずれがある。
- ・ 「強」の概念は強さと長さによって満たされる。
- ・ 「弱強調」は弱と強からのみ成り立っているのではない。
- ・ 「弱」と「強」の間には二つをつなぐ上昇・下降のリズムがある。
- ・ 強に該当する部分（山）の高さの度合いはほぼ同じである。
- ・ 弱に該当する部分（谷）の深さは様々である。
- ・ 強さの度合いは絶対的なものではなく、相対的である。
- ・ 山と谷の落差を見ることが重要である。
- ・ 一行中の最も深い谷のところに意味的、文法的な切れ目がある。
- ・ 軽い休止を入れられるのはもっとも深い谷のところである。
- ・ 浅い谷の前後は意味的、文法的に密接である。
- ・ 谷の深さを見て行けば、統語関係が見えてくる。
- ・ 山と谷が合わさって、一行中にブロックができる。
- ・ 語の発音はその長さにおいて辞書の定義の通りにならないことがある。
- ・ 音節の境目に谷がくる。
- ・ 強さの度合いだけから見ると、強強であっても長さの度合いを加えると弱強になる。
- ・ 行末の脚韻は右下がりて統一される。
- ・ 冠詞や前置詞は谷になりやすく、詩のリズムをつくる時に影の主役となる。
- ・ 一行に含まれる音節数は同じである。
- ・ 一行を読むのに要する時間はほぼ同じにすべきである。
- ・ 一行を読むのに要する時間がばらばらになると、詩の創造性が弱くなる可能性がある。
- ・ 一行を読むのに要する時間がばらばらになるほど、癖のある読みになる。
- ・ 一行にかかる時間が同じであれば、誰が読んでも山と谷がなす曲線は似てくる。
- ・ 詩形と（読みに要する）時間はきわめて重要な概念である。
- ・ 山と谷の落差は行ごとに異なる。
- ・ 谷の数が多く、深くなるほど、山と谷の落差が小さくなる。
- ・ まったく同じ弱強曲線の行がない。
- ・ 一行の谷がすべて浅い場合にはなめらかな調子になる。